第3編　坂田の生活と文化

第１章　坂田の教育と文化

坂田丘陵の中腹、ちょうど山すそに連なる住居を少し上がった小高い丘の上は、左から「大和田小学校」「周西中学校」「坂田小学校」「県立君津高等学校」「君津総合高等職業訓練校」が連なり、小学校から高校まで、そして職業訓練校までの一貫した文教地区を形成している。これらの用地については、地元坂田の地主の協力によるものであった。

周西中学校をはさんで、大和田小学校が昭和四十四年、坂田小学校が昭和四十七年にそれぞれ校舎が完成した。隣接する大和田地区に新日本製鉄の一大社宅群が建設され、多数の児童が転入してきたからである。

いずれにしても、坂田丘陵には小学校から高校まで、そして職業訓練校までの一連の教育施設が軒を連ね、いまや坂田は、君津市における「文教センター」として大きく発展しようとしている。

坂田尋常小学校から周西小学校へ

坂田における学校教育の起源は、明治十年五月、「長福寺」の一隅を借り受けて開設された「坂田尋常小学校」にさかのぼる。

明治新政府は、富国強兵の一環として、国民皆学を目ざし、明治五年に学制を制定、全国を大・中・小学区に区分して、学区ごとに小学校・中学校・大学校を設置して、小学校から大学までの一貫教育体制の整備を図った。これにより、明治八年までに全国で二万四〇〇〇余りの小学校が設置されたが、その多くは従来の寺小屋を再編したもので、実質就学率も三割程度にとどまっていた。そこで、明治十二年には教育令を制定し、四年間に最低一六カ月の普通教育を受けることを義務とした。

こうした動きに合わせて、君津郡下でも中野、人見などに小学校が開設されたが、坂田でも小学校開設の動きが起こり、明治十年五月、「坂田尋常小学校」の開設をみたのであった。といっても、当時はまだ児童数も少なく、適当な校舎もなかったので、「長福寺」の本堂の一部を借り受けて、読み、書き、そろばんを教える程度であった。

同校には坂田地区のほか大和田地区の児童も通学していたが、明治十九年、中・小学校令が公布され、義務教育が強化されるとともに児童数も次第に増加していった。そして、明治二十二年、周辺六カ村が合併して周西村が誕生すると、新しい小学校の建設が村人たちの課題となった。

明治三十一年六月、坂田尋常小学校は中野尋常小学校と合併し、「周西尋常小学校」が誕生した。初代校長は榎本安五郎で、校舎は中野区字溜井に設けられ、学級数は三学

■まぼろしの「其一塾」

明治以前、江戸時代の坂田の子どもたちがどのようにして読み、書き、そろばんを習っていたのか、それを伝える資料はない。ただ、多数残された古文書類の資料からかなりの教育が行なわれていたことは間違いない。おそらく、長福寺あたりで寺小屋が開かれ、坂田の子どもたちはそこで手習いを受けていたものであろうか。

それとは別に、坂田字宇和手の共同墓地の入口に、「牧野其一先生墓」と記された高さ二メートルぐらいの石碑が立っている。古老たちの語るところでは、昔、牧野其一というえらい先生がいて「其一塾」といって近隣の子弟を集め寺小屋式の教育を行なっていたと伝えられているが、この其一先生というのがどのような人物であったのか、そこでどのような教育が行なわれていたのかはまったく不明である。この碑の台石には「筆子」と刻んである。嘉永三年四十四才で没している。

牧野其一先生の碑

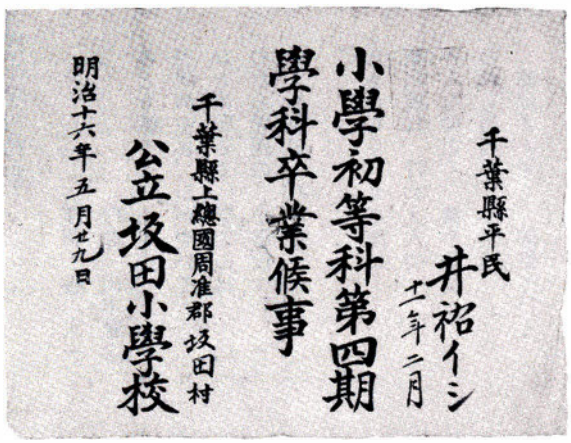
級、坂田のほか中野、大和田、人見などの児童が通学した。この年七月には高等科を設置し、校名も「周西尋常高等小学校」と改めた。翌三十二年三月、第一回卒業生が学窓を巣立ったが、卒業者数は尋常科三六名、高等科二名であった。

翌三十三年には、尋常科四学級、高等科二学級に増設した。児童数も次第に増加し、明治三十六年には全校で三四二人を数えるまでになった。児童数の増加状況からみて、ほぼこのころ学齢期の児童の全員就学が実現されたものと思われる。

児童数の増加に伴い、明治三十六年には校舎を坂田字龍畑に移転したが、三年後の明治三十九年五月には再び中野字中溜井に戻り、新校舎の建設に着手した。工事は順調に進み翌四十年二月、上棟式を挙行した。ところが、その二日後、突如として起こった大暴風雨で建築中の校舎が全壊し、改めて工事をやり直す羽目となった。

予期せぬハプニングに見舞われはしたものの、同年八月二十九日、第一、第二校舎が無事竣工した。総建坪二〇七坪強、木造平屋ではあったが、立派な校舎が完成し、児童たちを喜こばせた。校庭および外周についても村人たちの協力で整地および溝の整備が行なわれた。翌四十一年三月には、尋常科五四名、高等科二一名の児童がこの新校舎を巣立っていった。

翌四十一年には、尋常科を五学級、高等科を一学級に編成替えし、翌年には尋常科をさらに一学級ふやし六学級とした。四十四年には青年団員や高等科在学生の手によって石門を建立、さらに四十五年には、同じく青年団員の勤労奉仕により旧中野教場を改造して講堂とした。かくして、村人たちの協力でようやく体制も固まり、施設も充実してきた。



明治時代の卒業証書

大正時代に入ると、七年五月には補習学校校舎も建設され、翌八年には高等科が一学級増設されて二学級となった。すでにこの年、明治三十一年創立以来の卒業生は、尋常科で累計八九七人、高等科で二八一人に達していた。

大正十二年九月一日、関東大震災によって校舎が全壊するという災難に見舞われた。教師、児童に被害がなかったのは不幸中の幸いであったが、校舎が使用不能となったため、生徒は一時、長福寺や青蓮寺に分散して授業を受けることとなった。

校舎の再建は突貫工事ですすめられ、木造平屋建の新校舎が完成し、装いを新たにした。

昭和に入っても児童数は年々増加し、昭和九年四月には尋常科を八学級に編成替えした。

そして昭和十六年、戦時体制強化のため政府は学校令を改正し、「周西尋常高等小学校」は「周西国民学校」と改称した。その後も児童数は増加を続け、昭和十九年四月の児童数は九五四名を数え、学級数も尋常科一二学級、高等科四学級になっていた。

そして終戦。昭和二十年十二月には御眞影奉安殿（昭和五年に建設）が撤去されたが、昭和二十二年三月には、戦後民主化の一環として教育基本法、学校教育法が公布され、いわゆる〝六・三制〟といわれる新しい学校教育制度が確立された。これにより、同年四月、周西国民学校は「周西小学校」として生まれかわった。高等科は廃止され、高等科の児童たちは、新たに設立された「君津中学校」（君津町本師）へ通学することになった。

昭和二十三年には早くも「周西小学校ＰＴＡ」が発足し、講堂の改造や校庭の整備な

周西小学校校歌

作詞　脇　太一
作曲　山本雅之

(一)
みどり脈うつ　山や丘
君津の空に　かがやいて
ひとみ明るく　学ぶのは
われら周西の　小学校
若さと力が　みちている

(二)
光きらめく　さざ波は
東京湾に　ほおえんで
みんな仲よく　健やかに
われら周西の　小学校
二葉はすくすく　伸びて行く

(三)
風もさやかな　小糸里
希望の歌を　ささやいて
みがく真心　清らかに
われら周西の　小学校
大きな未来が　待っている

どに大きな役割を果たした。昭和二十五年には児童数も七六九人となり、学級数も増設、設備も年々拡充されていった。昭和二十九年には、脇太一作詞、山本雅之作曲になる「周西小学校校歌」が作成されるとともに、校章、バッヂが制定された。

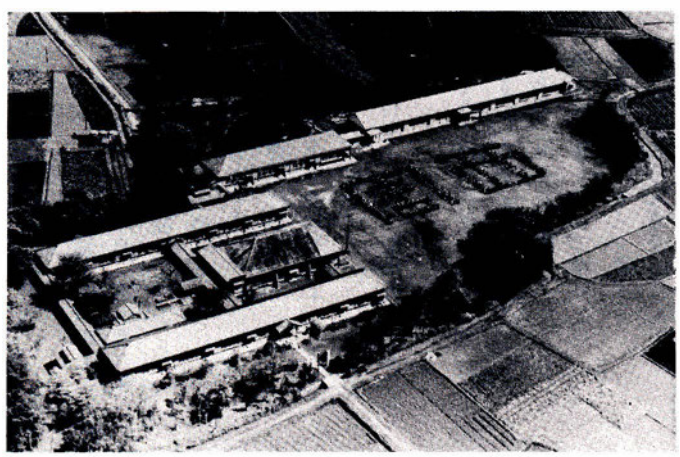
周西小学校は、各学科についてその充実を図ってきたが、とりわけ社会科には力を入れ、昭和三十年には社会科研究学校として県の指定を受けた。また、この間、校舎の老朽化と児童数の増加に対処して、校舎の増改築をすすめていった。

しかし、新日鉄の進出に伴い、児童数は急増し、昭和四十六年三月、周西小学校は明治三十一年の創立以来七四年の輝かしい業績を残して現在地に移転した。

君津市立坂田小学校

新日鉄の君津進出は、坂田および君津のあらゆる面に大きな波紋を投げかけたが、教育問題も例外ではなかった。坂田に隣接する大和田地区には戸数延べ二〇〇〇戸の一大社宅群が誕生し、新日鉄の操業本格化とともに多数の社員が移り住んできた。その子弟の受入れをどうするか――それは単に周西小学校関係者だけでなく、君津町全体の大きな問題となったのである。

もちろん、従来の周西小学校に全員吸収するのはとうてい不可能である。いずれ新しい学校を建設しなければならない。では、どこにどのような学校を建設するのか……。いろいろ協議を重ねた結果、坂田丘陵の学校群の中に「周西中学校」「大和田小学校」「坂田小学校」を逐次設置することに決定した。



周西小学校（昭和35年頃）

こうして、昭和四十六年四月、「君津町立坂田小学校」が創立された。まだ本校舎が間に合わず、一部プレハブ校舎での授業ではあったが、坂田地区の児童たちは、新しい学校への通学をはじめた。同年九月には、市制の施行により、「君津市立坂田小学校」となった。

翌四十七年三月、鉄筋コンクリート三階建、一八教室、三五一九平方メートルのモダンな新校舎が完成し、四月からは新しい教室での授業が始まった。四十八年三月には図工・家庭・理科・音楽の各学科と図書館からなる特別教室棟が竣工し、教育はいちだんと充実した。さらに四十九年には、体育館とプールが完成、また校歌、校章も制定されて、名実ともに新しい学校として面目を一新した。

新生坂田小学校では各種教育に力を入れ、四十九年十二月には学習研究社より学校賞を受賞、翌五十年四月には学校保健研究校として県の指定を受けた。また、五十一年十月には君津地方A方式教育課程研協議会の会場校となり、国語・社会・算数・理科・特別活動の授業と提案を展開し、好評を得た。

この間、環境施設の充実にも力を入れ、昭和五十二年には正門横に模擬道路を完成、道路交通の安全教育に万全を期すとともに、校地周辺築堤三カ年計画を立案、実施に移した。これにより、初年度の五十三年には「さくら」の堤が完成、五十四年には南側に「にせあかしあ」と「夾竹桃」を植えた。そして五十五年には西側堤に「くす」と「もち」の木を定植し、三カ年計画はすべて完了した。そのほか、子どもの遊び場の小山をつくり、教諭と児童たちは新しい学校づくりにはげんでいる。

坂田小学校の校地面積は二万六七〇〇平方メートル、坂田丘陵のほぼ中央、雑木林に

君津市立坂田小学校校歌

作詞　阪田寛夫
作曲　市川都志春

(一)
丘に立ては海の風
工場と船とかもめたち
波のかがやくそのはてに
ひろい世界が待っている
さがそうよ　さがそうよ
　あしたの虹を
高く目をあけて　坂田の子どもたち

(二)
耳をうつは松の風
すずしい声でよびかける
水とみどりのこの町に
みんな大きく伸びてゆけ
かんがえて　かんがえて
　みがこう知恵を
深く根をはって　坂田の子どもたち

(三)
雪も雨も嵐にも
まけずにたえて若木たち
こころひとつにたすけあい
あすのみのりを育てよう
たしかめて　たしかめて
　一筋の道
いまぞ　いざすすめ　坂田の子どもたち

かこまれた豊かな自然と、最新の教育機器を備えた新しい校舎の中で、子どもたちは伸び伸びと遊び、また勉学にはげんでいる。

ちなみに、五十五年四月の児童数は八〇六名。うち在来の地元民の子弟は五％で、他はすべて新日鉄進出以後移り住んだ住民の子弟で占められているが、児童たちの間にはなんのわけへだてはない。

「言語、生活様式の違い、仲間意識の対立などからくる地元民とのまさつも心配されたが、今日までのところほとんど問題はない。むしろ父兄の指導などもあってか、新住民たちは積極的に地元に融和しようとする好ましい姿勢がみられる。」

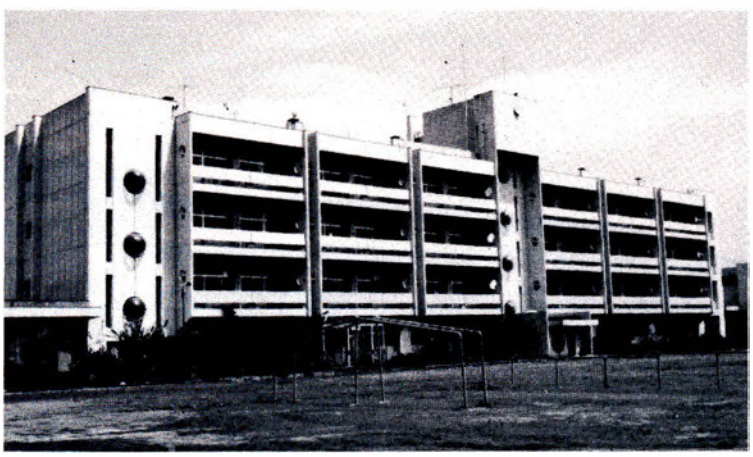
坂田小学校のある教諭の言である。

君津市立大和田小学校

それまで周西小学校の学区であった坂田・大和田・人見・神門の児童数は激増し、昭和四十三年二月の君津町議会の議決により、同年四月一日君津町立大和田小学校が創立された。児童数三五〇名、職員一七名、一二学級の編成で開校した。

創立当初は周西小学校の教室を使用し、周西小学校と同一経営で運営された。

昭和四十三年八月、君津町大和田四二五番地の山林三万平方メートルを買収し、直ちに整地作業を行ない、昭和四十四年三月整地を終わる。新校舎は建坪八、二〇〇平方メートル（普通学級三〇、特別教室六、管理棟）、鉄骨三階建てにて、昭和四十四年十二月完成の予定で着工された。



坂田小学校

この間にも児童数は増加の一途をたどり、一学級六〇～七〇名のすし詰め学級で授業が行なわれた。四十四年一月、四月と二回に分けられたプレハブ教室の増築は一二教室を数えるに至った。

市街地造成工事は随所に続き、旱天には砂埃に目を覆い、雨天には文字通り泥濘に靴をとられて、四キロメートル余りを通学する児童の困難は筆舌に尽くし難いほどであった。

したがって、校舎の一部完成を待っての移転を考え、第一回は管理棟・西棟の完成に伴い四十四年十月、二・三・五・六年の移転を行ない、同年十二月東棟の完成により一・四年の移転を終え、全校が新校舎で学習できるようになった。この時児童数は一、二〇〇名、創立一年半で三倍以上を数えるようになっていた。

新校舎は、当時の君津町町勢の発展する力を示したものであり、全国的にもトップクラスといえる近代的な施設を誇るものであった。「文部省は鼻高々であったが、補助金支出側の大蔵省は渋々顔であった」というエピソードも聞いている。四十六年をピークとした県外・県内の各地から訪れた参観者は、みな驚歎の声を上げていた。

四十五年五月、校歌・校旗・校章が制定された。同年八月、プール完成。二五メートル、八コースおよび低学年用プールが設置された。それまで周西小プールを借用し、歩いて水泳練習に行っていたが、校地内での大きなプールで思う存分泳ぎ回れる子どもたちの喜びは大きかった。

児童数の増加はその後も続き、四十六年三月一日には、一、四七一名(創立当時の四・二倍)、職員四六名を数えるに至った。新校舎前にプレハブ教室一三が増築され授業が行なわれていた。

大和田小学校

昭和四十六年四月一日、坂田小学校が大和田小学校より分離し新設された。しかし、その年度は同居、同一経営という方針で運営された。四月一日現在、両校合併の児童数一、五七二名、職員五六名が相励ましあって教育活動の充実に努めた。大和田小学校はこの年度より校庭の整備、植樹、遊具の設置などが始められた。

四十七年九月一日、一、三五〇平方メートルの体育館が完成した。週一時間の使用は、利用回数としては少なかったが、雨天の体操場として、また、今まで屋上や校庭を使っていた集会も屋内でできるようになったことは、指導の効率を高める上で大きく役立った。

体育館の完成後、今までも進められていた環境の整備充実に力が注がれるようになった。小鳥飼育舎の設置、植樹の充実、模擬道路の設置、正門設置とその周辺の整備、岩石園・国旗掲揚ポール・創立十周年記念碑・ＰＴＡ全国表彰記念像の寄贈など、教育環境の充実は目を見はるほどであった。また、放送施設をはじめ教材教具の充実が急速に進められた。

これら施設・設備の充実とともに、真摯な教育活動は創立当初よりたゆみなく続けられてきた。児童数の急増は必然的に教員の増員を伴い、それらは若年層の教員のみによって充足せざるを得ない状況であった。

めざす児童像の設定、きめ細かな学級経営、指導方法の基礎的研究、若年層教員を対象とした初期教員研修など独特な計画のもとに研究を進め、困難な状況の中でも着実に教育効果は高められていった。

昭和四十四年度を最初として五回にわたる自主公開研究会で研究内容を発表し指導を

君津市立大和田小学校歌

作詩　村越利一良
作曲　村瀬　実

(一)
東京湾の朝風に
鳴るよ　日の丸　ひるがえる
すべてのものが　芽ぐむとき
学びの窓に　光りあれ

(二)
われらの　大和田小学校
鹿野の山の　日にはえる
流れゆたかな　小糸川
鍛えよ　友よ　身とこころ

(三)
根性に耐える　誇りあり
われらの　大和田小学校
はるかに　富士は　かがやきて
鉄のけむりが　立ちのぼる
六とせを育つ　学びやに
文化の息ぶき　新たなり
われらの　大和田小学校

仰いだ。その研究内容は、児童の学力向上の実態とともに高く評価された。

このほかに、初任教員研修会場二回、県図工研究会場、南総教育センター女子幹部教員研修会場二回、県教育センター教務主任研修会場などに指定され、授業公開、提案などをして好評を得た。また、五十五年十月、全国統計教育研究大会会場校として授業公開、提案などをし、参会者からその内容を高く評価された。

児童の活動も年々充実し、四十四年に創設された器楽合奏クラブは、その高度な演奏ぶりを評価され、四十六年東日本コンクールにおいて優秀賞を獲得した。毎年の校内演奏会では、子どもや父兄に大きな感銘を与えてきた。また、読書感想文コンクールでは、五十・五十一年と連続全国入賞、科学工夫作品展では五十四年・五十五年と連続全国最高位入賞、五十五年には県統計図表コンクールで学校賞、同年県統計研究発表会では最高位入賞など、大きな賞を重ねて受賞してきた。

運動面でも、各種競技会において、優勝・準優勝を数回獲得し大きな成果をあげてきている。

全国から集まってきた父兄（保護者の出生地調べによると福岡県二七％、千葉県一八％、出身者のいない県は、富山、岐阜、愛知、滋賀、岡山の五県のみ（五十三年九月調査）によって構成された大和田小ＰＴＡは、その構成の特殊性から、創立当初より会員相互の融和を重点として運営されてきた。その成果は大いにあがり、ＰＴＡの主体的な活動は学校教育の強力な支えとなり、会員相互の研修など地域の教育条件の整備に大きな力となってきた。昭和五十五年全国表彰を受け、今後の活動への期待は大きい。

昭和五十三年度当初、新しい児童像の形成をめざし、「考える子、思いやりのある子、

■君津町市内小中学校児童生徒数の推移

君津市教育委員会調

年	小学校	中学校	計
35	一、七六六	九八五	二、七五三
36	一、六一七	九九四	二、六一一
37	一、五三二	一、〇三四	二、五六六
38	一、四二一	九六五	二、三八六
39	一、二八八	九〇八	二、一九六
40	一、三四六	八五八	二、二〇四
41	一、二九六	七六九	二、〇六五
42	一、三四二	七一九	二、〇六一
43	一、九七〇	八八二	二、八五二
44	二、六三九	一、一四一	三、七八〇
45	三、三六九	一、四八三	四、八五二
46	三、八七〇	一、七二一	五、五九一
47	四、二四九	一、八九八	六、一四七
48	四、二五六	一、九三七	六、一九三
49	四、六五七	一、九五四	六、六一一
50	五、〇七四	一、九六七	七、〇四一
51	五、二六三	一、九四三	七、二〇六
52	五、三六四	一、九九七	七、三六一
53	五、五八三	二、一一七	七、七〇〇
54	五、八七四	二、〇八七	七、九六一
55	五、八八六	二、二七四	八、一六〇
計	六九、六六四	三〇、六三三	一〇〇、二九七

注　昭45・9・28　3町2村合併
昭46・9・1　君津市制施行

運動する子」と設定された。それらが学年目標として具体化され、全校的な教育活動や学級の指導実践の中に組織化されてきている。創立十数年を経過し、施設設備の充実による恵まれた環境、豊かな雰囲気、充実した教育活動などにより、大和田小学校は将来の発展への道を力強く歩み続けている。

君津市立君津中学校

昭和二十二年三月、新しい六・三制の学制実施に伴い、町立新制中学校を設立することになった君津町では、周西、八重原の両校を合併し君津中学校の誕生を見るに至った。初代校長は小川政吉であった。昭和二十二年五月十日君津郡君津町立君津中学校として発足した。

翌二十三年三月二十五日、君津、貞元組合立君津中学校として再発足し、二十四年学校敷地も決まり遂次整備に努力したが、当時は終戦後日も浅く人心の安定を欠き、社会は戦争の痛手を蒙り、生徒への影響も大きかった。荒れ果てた環境に混乱した世相は教育の芽をはばんだ。しかし着々と環境を整備しながら内容の充実と職員自身の研修活動が盛んに行なわれた。特に職業家庭科を中心として数回にわたる公開研究会を展開し、君中の名声をとどろかした。その主題は「農村中学校に於ける生活経験を如何に導くか」――特に職業家庭科カリキュラムとその展開方法であり、文部省の研究指定校として実績が認められ、昭和二十七年十一月県教育委員会より表彰を受けた。

昭和二十九年三月、新君津町発足により君津町立君津中学校と改称する。昭和三十一

君津中学校（昭和23年創立当時）

年度には校旗、校歌が制定され、新運動場（一〇〇〇坪）が完成した。昭和三十四年には新校舎建築地鎮祭（現校舎）が挙行され、普通教室二棟（十二教室）が新築、続いて翌三十五年管理棟および普通教室六教室、昭和三十七年六月には理科室、準備室が完成し、千葉県理科教育施設設備モデルスクールの指定を受ける。昭和三十八年三月には技術棟、昭和四十一年九月には音楽室棟など完成をみた。さらに昭和四十三年一月体育館が完成した。

施設設備の充実を機に職員も研修に励み、文部省より生徒指導研究推進校の指定を受け、全国公開研究会を実施する。主題は「ひとりひとりの自己実現をはかるにはどうしたらよいか」であった。この頃新日鉄の誘致により生徒が急増したため、昭和四十三年四月、君津町中学校設置条例の一部改正により君津中学校より周西中学校を分離した。昭和四十四年七月七日待望のプールも完成したが、生徒はますます増加の一途をたどり、昭和五十年九月にはプレハブ（四教室）、五十三年四月プレハブ（一教室）、五十五年四月に二教室、五十六年四月に三教室と増築した。

君津市立周西中学校

坂田をはじめ旧周西地区の中学生は、終戦から昭和四十三年三月まで、杢師にある君津中学校へ通学していた。もし新日鉄の進出がなかったならば、そのままの状態が続けられていたかもしれない。

しかし、新日鉄の進出とそれに伴う新住民の流入によつて、君津中学校だけでは増加

君津市立君津中学校校歌

作詞
作曲　白鳥省吾

一、三船の山の緑濃く
　小糸の流れ水清し
　田畑の幸に海幸を
　添えて豊けき君津町
　ここに輝く中学校

二、朝日に起きて健やかに
　伸びゆく我ら今日もまた
　学びの園に集りて
　共に真理の泉くむ
　楽し仲良く励みつゝ

三、東京湾の空遠く
　けだかき富士をみるところ
　生命の花は咲き香り
　若き力に道開く
　うれし君津のわが母校

する生徒を収容しきれなくなり、新しい中学の創設が焦眉の課題となった。

そして、昭和四十三年四月、坂田丘陵の一角に「君津町立周西中学校」が創立された。(四十六年九月市制移行に伴い「君津市立周西中学校」となる)。当初は君津中学校敷地内に設置されたプレハブ校舎の仮教室で授業が行なわれ、四十四年三月、第一回卒業生一〇五名を送り出した。

この年五月には鉄筋コンクリート四階建の第一校舎(普通教室一五)が完成し、新教室での授業が始まった。翌四十五年五月には同じく鉄筋コンクリート三階建の第二校舎が完成、最新の教育機器を備えた特別教室が設置された。そして同年十一月には、それら教育設備の実験校として「教育機器の活用と授業改造」をテーマとして公開研究会が催された。次いで、翌四十六年五月には体育館、四十七年十一月には二五メートルプールが完成した。

この間にも生徒数は増大の一途をたどったので、四十八年二月には普通教室九室を増築し、その内容を充実していった。同年十一月にはNHK放送教育指定校として「教育機器の活用と授業改造」が公開された。

昭和五十年からは学校内外の環境整備に力を入れ、テニスコートの整地、国旗掲揚塔の設置、校門の完成、いちょうやプラタナスの植樹などを行なった。

周西中学校は、坂田小学校と大和田小学校にはさまれた形で立っており、両校と周西小学校の卒業生を受け入れている。五十五年現在、男子五一一名、女子四七七名、計九八五名の生徒が在学し、この付近では有数の大中学校となっている。

周西中学校の教育目標は「生涯を通じて豊かな情操と創造力をもって、誠実にたくま

周西中学校

しく生き抜くことのできる、健康な人間の育成を目ざす」ことに置かれている。そのために、教職員、父母、地域社会が一体となった有機的連携が図られている。また同校では教育機器の有効活用にとくに注力しており、昭和五十三年の学校祭では「特色ある生徒活動」というタイトルで校内の活動状況をテレビで放映するなど、ユニークな活動を展開している。

千葉県立君津高等学校

この高校も、あえていえば新日鉄進出による落とし子として誕生をみたものである。

戦前、君津周辺では、中学校は木更津中学しかなく、上級学校への進学を目ざす生徒は同校まで通学していた。戦後、学制の改革によって木更津中学校は木更津高等学校となった。また、君津市小糸町に上総高等学校、富津市湊に天羽高等学校が、同じく富津市西大和田に君津商業高校が開設され、高等学校の門は広がり、進学者も増加していった。坂田地区でも年々高校進学者がふえ、地元に高等学校をの声は日に日に高まりつつあった。

こうした動きを加速させたのが新日鉄の進出で、中学在校生の急増とそれに伴う高校進学希望者の急激な増加によって、高等学校誘致の要望が一挙に沸き立った。

昭和四十三年、君津町の有志は高校誘致委員会を結成し、具体的運動を開始した。当時、君津地区では、新日鉄の進出に伴い、関係市町村が集まって君津郡市広域市町村圏事務組合を結成し、合併問題を含め各種問題を協議していたが、高校誘致についてもそ

君津市立周西中学校校歌

作詩　鈴木昌次
作曲　長谷川良夫

(一)
なだらかに緑つらなり
歌声はずむ丘の上
潮風をふかく吸いこみ
真向いに富士を仰げば
雲光り胸はたかなる
ああ周西中学校
若い希望ここにあふれる

(二)
青空を遠く見つめて
思いをこらすまなざしよ
広々と開く行く手に
友情の明かりかかげて
あくまでも真理求める
ああ周西中学校
若いひとみここに輝け

(三)
世の姿ははげしく移り
時代の荒波荒れるとも
ゆるぎなく堅く鍛えて
鉄の町　世界の君津
その誇り高くかざそう
ああ周西中学校
若い力ここにみなぎる
若い力ここにみなぎる

の場で協議した結果、関係市町村から委員を選出して高校誘致委員会を結成するに至ったのである。委員長には当時の小櫃村長であった松崎純が選ばれ、昭和四十四年二月、「高校設立請願書」を県当局に提出した。

しかし、事は容易には運ばなかった。地元の要望は県立高校の誘致であったが、当時の千葉県の文教行政は私学育成にあったこともあり、私学からの反対などがあって関門にぶつかってしまったのである。そこで委員会は、松崎氏を中心に知事をはじめ関係各機関を訪問して地元の熱意を披れきする一方、君津地区の急増する中学卒業生の実態を調査し、具体的資料に基づいて高校設置の必要性を強く訴えた。この間、地元県会議員にも協力を要請、また千葉県私学会長とも会って根気強く説得につとめ、ようやくその了解を得ることができた。

かくして、昭和四十五年十二月、君津高等学校の設置が決まり、学校用地は坂田丘陵の一角、六万六一一五平方メートルが確保されることになった。そして、校舎の建築や開校準備が急ピッチで進められ、四十六年四月、県立君津高校が開校した。初代校長は市原雄忍であった。

初年度は一年生のみ四学級のクラス編成であった。まだ本校舎は間に合わず、プレハブ教室での授業であったが、在学生は第一期生としてよき伝統をつくり出すべく、勉学にはげんだ。

翌四十七年三月、鉄筋コンクリート四階建、普通教室一八、特別教室二室からなる普通教室棟が完成、新学期から新教室に移った。またこの年には、募集定員が八学級、三六〇人であった。翌四十八年には、校旗、校歌を制定、特別教室棟が完成したほか、管

君津高等学校

理棟、体育館、プールなどが整備され、ようやく学校としての体裁をととのえた。明けて四十九年三月には第一回卒業生を送り出した。

その後も校歌歌碑の建立、グランドの整備、小集会場（剣道場・卓球場）、開校記念館（宿泊訓練所）、体育用具倉庫などが次々と完成し、施設を充実させていった。また、周辺の緑化事業もすすめ、逐次環境も整備されていった。

君津高校は、五十四年五月には文部省指定教育過程研究指定校として、過去三年間にわたる研究成果を発表し、好評を得た。校長は、この間、市原雄忍から関本克己、龍門恒夫と代わったが、高い知性と豊かな情操、そしてたくましい体力、気力という教育目標をかかげ、一〇周年に向けて雄々しく進んでいる。

ちなみに、昭和五十五年の教職員数は七〇名、生徒数は一〇九七名を数え、君津市内をはじめ、近隣の市町村からの生徒がここに学んでいる。

君津総合高等職業訓練校

昭和三十年代の半ば、東京湾の埋立てがすすみ、千葉から市原、市原から木更津へと伸びるに従って、海を放棄した漁民たちの転業促進のため、職業訓練所の設置が問題となってきた。君津地区でも君津漁協が漁業権を放棄、埋立てが始まった時点で、職業訓練所を誘致しようという動きが強まってきた。

坂田地区では、漁業組合が漁業権の放棄に反対の姿勢をとっていたが、昭和三十九年には漁業権の放棄は避け得ない情勢となり、訓練所の誘致運動は本格化した。職業訓練

県立君津高等学校校歌

作詞　沢田繁二
作曲　山本金雄

(一)
上総山波　陽に映えて
銀蛇の流れ　小糸川
山河の生命　さながらに
明るく立てり　わが母校
おお　君津高　新たなる
文化の旗を　打ち樹てん

(二)
鹿野の山の　空遠く
多感の日々を　思ふかな
若き集ひに　夢があり
新興の意気　力あり
おお　君津高　豊かなる
理想の園と花咲かん

(三)
袖が浦波　遠ざかり
滄海変はる　この郷土
坂田の台に　こだまする
世界の息吹き　君知るや
おお　君津高　逞しく
いばらの道を　拓くもの

所については、当時、木更津市でも誘致の動きがあり、いわば競合関係にあったが、当時の坂田区長牧野仲らは、時代の趨勢を読みとり、海を失った人々、あるいはこれから失おうとしている地元漁民たちのために訓練所の必要性を痛感し、昭和三十九年八月、町会議員であった水越曠の紹介で町長および町会議長に請願書を提出した。町長および町議会も、転業漁民の職業訓練のため、そして将来の君津の発展のため職業訓練所の誘致を積極的にすすめ、関係各当局と折衝を重ねた。その結果、坂田丘陵の一角、坂田字木廼加輪山林の坂田住民の共有地に設置が決まり、昭和四十年十一月、同地の三町六反五畝一歩を君津町に売却し、職業訓練所が建設されることになった。

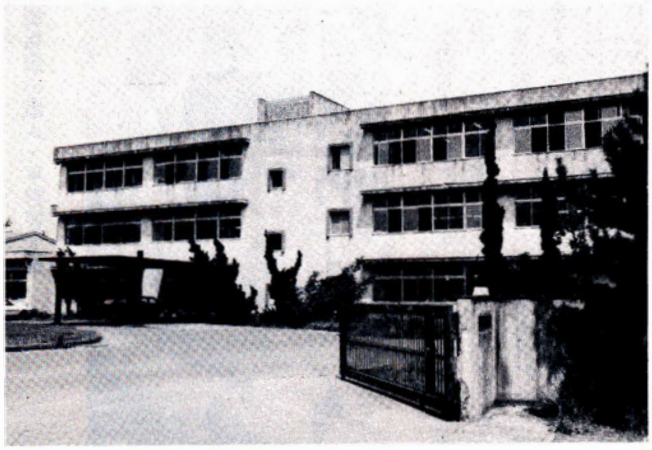
昭和四十一年四月には、鉄筋コンクリート三階建の教室および訓練施設が完成し、「君津総合職業訓練所」が開所した。

昭和四十四年十月には、訓練校法が改正され、教科の内容が充実されるとともに、名称も「君津総合高等職業訓練校」と改称した。同訓練校の訓練科目は、機械科（機械）・（仕上）、建設機械整備科、自動車整備科、板金科、溶接科、塗装科の七科目で、定員は一一五名である。

当初、同校は主として近隣の転業漁民の職業訓練に当たっていたが、それもほぼ一巡し、今では広く千葉県全域をはじめ、全国から訓練生を集めている。

活発だった青年団活動

明治になって、学校が整備され、義務教育制が敷かれたとはいっても、それは尋常高



君津総合高等職業訓練校

等小学校までで、中学校に進むのはほんのわずかの人にすぎなかった。それに代わって全国に組織されたのがいわゆる〝青年会〟や〝青年団〟で、村の将来を担う青少年たちは自発的な青年組織を結成し、いわば自主的な社会教育の場として活発な活動を展開していった。

ここ坂田でも、明治二十年ごろには村の青年たちが集まって、さまざまな活動を行なっている。今では当時の状況を知っている人もいなくなってしまったが、明治末期ごろには青年会が字新関谷（上堰）の東奥部を開墾し、稲を作ってそれを売り、会の経費に充てていたと伝えられており、かなり活発な活動を行なっていたことがうかがわれる。

周西村青年団が正式に設立されたのは明治四十四年四月のこと。その後、大正四年九月には千葉県訓令第三一号青年団設置準則が公布されているので、周西村青年団もこの準則にのっとって改組されたものと思われる。この当時には、青年団が中心になって、周西小学校の校庭の整地や外周の整備を行なったり、講堂の修築を行なうなどの活動をしている。また、青年団、処女会（女子青年団）は、講習会や研修会、運動会、雄弁会などの活動を行なっている。

大正から昭和にかけて、農村青年の娯楽は乏しいものであった。昭和恐慌が吹き荒れる中で、農村の生活は苦しくなるばかり。手を打つすべもなく、政府はただ農村の自力更生を説いていた。こうした中で、周西村では、毎年十二月から三月までの農閑期を利用して「青年夜学会」が設けられた。小学卒業生の男子を中心として、夜、周西小学校に集まり、訓導先生の補習授業や講話を受けたのである。また、女子には補習科が設けられ、和裁、料理を中心に授業が行なわれた。

■坂田の歌人・平野晋太郎

平野晋太郎（昭和18年9月）

平野晋太郎は大正九年六月二十二日に周西村坂田一三一六番地に生まれた。少年のころから短歌に親しみ、一七、八歳の青春時代は「アララギ派」の歌人として、その将来が期待されていた。しかし、昭和十五年十一月三十日、召集により佐倉歩兵第五七聯隊に入隊。その後は北支へ派遣され、濠北、ハルマヘラなどに駐屯し昭和二十年一月三日、二十四歳の若さで、モロタイ島にて斬り込み隊に属し戦死した。故人をしのびながら、その秀作のいくつかを掲げたい。

生死にかかはる程の暇なく
堆土の陰ゆ身を躍らしぬ

「アララギ」昭和十六年十月号

夜学は青年たちの知識欲を刺激するとともに、格好の交流の場ともなった。青年たちの中には、夜学に通うということを口実に、恋人のもとへせっせと遠征する者もいたようであるが、いわばそれも青年の特権であった。なによりも血気盛んな若者たちである。あふれんばかりのエネルギーが恋に走っても無理のないことであろう。そして、そのエネルギーは、地域対抗の運動会や雄弁会にも向けられ、娯楽に乏しい農村の青年たちの楽しみとなったのである。

しかし、満州事変が勃発し、軍事色が強まる中で、昭和十年十月、全国で一斉に青年学校が開校されるに及び、夜学会は青年学校と名を変え、教育の内容も軍事教練中心の軍事色の強いものとなっていった。そして、坂田でも、屈強な青年たちが次々と戦場に狩り出されていった。

ところが、昭和二十年八月の敗戦によって、それまでの価値はすべて否定され、自由と民主主義へと思潮は一変する。食糧難と物資不足にあえぎながらも、戦地から、工場から故郷へ帰ってきた若者たちは、価値観の急転換にとまどいながらも、新しい時代の到来を肌で感じとり、新知識の吸収にどん欲に立ち向かっていった。自由への風潮、文化国家建設の声に魅かれて演説会に熱狂したり、文化会や研究サークルをつくって、平和に酔い、自由を謳い、そして再生のきっかけを求めていったのである。

坂田でも二十代そこそこの若者たちが集まって「坂田読書会」(リーダー、秋元晋、小幡良一)がつくられた。乏しい本を持ち寄っての輪読会。彼らはそうすることによって戦争でぼろぼろに蝕まれた心身をいやし、知識欲を満たそうとしたのであった。また、それより少し年長の者たちが三〇名近く集まり「坂田新生会」(リーダー、坂井守、坂井

息づまる如き須臾あり友軍の
放つ砲弾の下に伏しつつ
「アララギ」昭和十七年五月号

醉ひしれて歌を唄ひている我に
かかる悲しみ在ると思ふや
「アララギ」昭和十七年八月号

病み病みて果てなむ吾れがいま一度
烈しき戦に果てたきものを
「アララギ」昭和十七年十月二号

此の頃の想ひはなべて故郷の
老いたる父の上に及ぶも
「アララギ」昭和十八年一月号

米吉、平野與志雄）なる組織もつくられた。戦後の混とん期にあたり、坂田のあるべき姿をつかみ、実践することを目的とした会であったが、はっきりとした理念も描けぬまま、数年も経ずに消滅してしまった。

だが、戦後の青年団のスタートは、二十一年の君津青年団の結成から再出発した。坂田には「坂田青年分団」が生まれた。戦後の混乱の中にありながらも、早くも昭和二十二年には、青年団の手で君津町陸上競技大会が開かれた。それはあたかも敗戦の傷手を吹き飛ばし、新生日本を祝うセレモニーのごとく、青年たちの団結とコミュニケーションを示す一大催事となったのである。

この陸上大会はその後毎年開催され、坂田の青年たちもこぞって参加した。坂田青年分団はこの大会で常に優勝か準優勝を獲得し、坂田青年の心意気を示したのである。しかし、新日鉄の進出問題をきっかけに、昭和三十六年の大会を最後に中止されたのは残念である。

戦後の二十三年と二十四年には、町の雄弁大会も開かれた。坂田の若者たちも積極的にこれに参加し、「われわれの坂田に向かって」漁業組合事務所で夜おそくまで激論を闘わせ、練習にはげんだ。その後、一時中止され、三十一年から三十八年まで続けられたが、坂田の青年たちは先輩たちの伝統を受けついで、積極的に参加を続け、雄弁をふるった。

昭和二十年代末から三十年代半ばまで、青年団活動も最も充実し、黄金時代を迎えた。陸上競技大会や雄弁大会もさりながら、青年団の主催で旅行に出かけ、野球大会や映画会を催すなど、活動も多彩になった。また、農業や漁業など生産に密着した活動もすす

■歴代青年分団長と陸上競技大会成績

戦後再出発した君津青年団坂田分団の分団長と、君津陸上競技大会における坂田分団の成績は以下のとおりであった。

年次	分団長名	陸上競技
昭和21年	広部　勝一	
22	平野　豊作	準優勝
23	広部作次郎	準優勝
24	坂井　俊雄	準優勝
25	伏居　正夫	優勝
26	広部　安蔵	優勝
27	広部　俊雄	優勝
28	秋元　秀夫	優勝
29	安藤　喜男	優勝
30	北見　薫	準優勝
31	栗原　崇	準優
32	牧野　皓一	準優勝
33	坂井　清一	優勝
34	苅込　繁雄	優勝
35	広瀬　寿	優勝
36	高瀬　光男	
37	広瀬　孟男	
38	小野　孟男	
39	初津　昭一	
40	本間　久雄	

め、浜掃除や苗代予防、七ツ堰の釣堀りなども行なった。

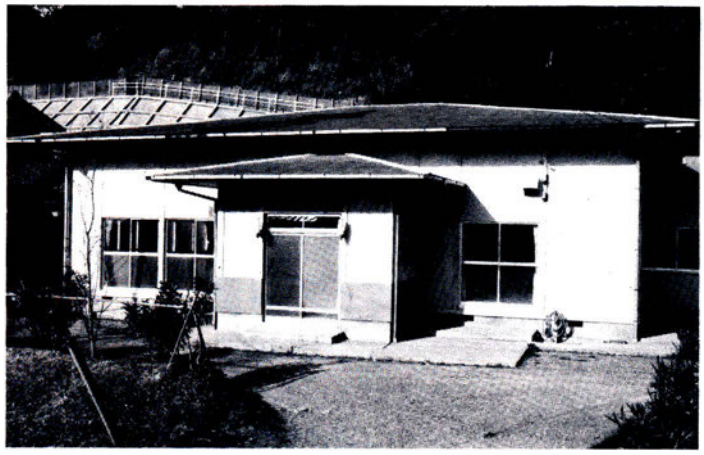
昭和三十一年には米軍のジェット機が坂田海岸沖に墜落するという事件が起こったが、このときも青年団は、機材の引き揚げや救援活動に協力し、その機敏な行動が大いに評価された。

しかし、昭和三十年代後半にいたって、日本経済の高度成長とともに、物の豊かな、余暇や娯楽に恵まれた時代となっていった。それとともに、長男は別として、坂田の青年たちも職を求めて千葉や東京方面へと出ていく者が多くなっていった。そして、青年団員のメンバーも次第に減少し、団員不足から活動も鈍りはじめた。このため、昭和三十九年には団員の年齢を従来の二五歳から三〇歳に引き上げて再編を図ったが、それも二、三年しか続かなかった。

事ここに至って、坂田青年分団は、明治四十四年の設立以来五十数年の輝やかしい活動歴に終止符を打ち、その幕を閉じたのである。

坂田青年館の建設と坂田青年部

坂田青年分団としての公式の活動は停止したものの、坂田の青年たちは、漁業権の放棄、そして土地区画整理事業という部落をあげての大事業の中で、自主的な活動を続けてきた。折から、千葉県では、青年教育の振興の一環として青年館の建設を推進しており、坂田近辺でも、昭和三十九年に小山野に建設されたのを皮切りに、神門、台住、杢師、人見などで青年館の建設が相次いでいた。



坂田青年館

こうした動きに触発されて、昭和四十五年二月、坂田選出の町会議員である坂井五郎と平野與志雄の両名は、議会活動報告文書の中で坂田青年館の建設を呼びかけた。

「最近、青年館または農村協同館の名目で部落集会所が建設されている。坂田も今大変革期に直面しているので、集会所建設の方向づけをすべきである。予算審議の都度、どこかの部落で建設議案が出され、三十九年小山野、四十三年神門、台住、四十四年杢師、人見が建設済み、四十五年申請は久保、外箕輪である。」

この呼びかけに応えて、同年四月には、新関谷共有地処分金の分配の際、共有者八九名より一人当たり三万円の寄付金をあおぎ、それを建設資金に充当する同意を得て、青年館建設は具体的に動き出した。建設場所も旧漁業協同組合跡地と決定、その年秋には早くも着工した。そして、昭和四十七年三月、木造平屋建、モルタル塗り、建坪一七七平方メートルのしょうしゃな建物が完成した。総工費は八八七万円余。県および市の補助金のほか、県転業漁民対策費、坂田漁協、坂田土地区画整理組合、新関谷溜池共有者ならびに一般住民の寄付でまかなわれた。

昭和四十年代、漁業権の放棄、土地区画整理事業の推進という坂田の一大変革の中で、坂田の青年たちも東奔西走、青年団運動に精力を集中する余裕などない日々を過ごしてきた。しかし、新日本製鉄の進出、区画整理事業の完成をみるに至って、転業後の新しい事業も軌道に乗りはじめてきた。また、大量に流入してきた新しい住民を迎えて、新しい地域社会、新しいコミュニケーションの場をつくろうという気運も盛り上がってきた。

そんなある日、昭和五十一年九月のことであった。坂田の秋祭りを目前にして、土着

■青年館建設委員

坂田青年館の建設に当たっては、その推進のため坂田から次の七名の委員が選出された。

秋元　聰、井祐　稔、初津新蔵、平野與志雄、安藤　正、坂井五郎、坂井俊雄

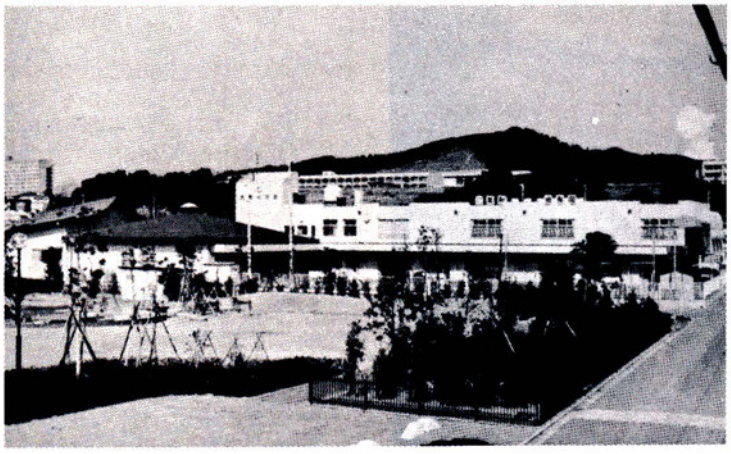
坂田青年館落成祝賀会（昭和47年３月15日）

の青年たち二十数名が集まって「坂田青年部」なるものを結成した。リーダーは安藤敬治で、任意による青年の団体が生まれたのだ。

坂田青年部は、家族ぐるみの旅行や登山など、グループ内での親睦を図るとともに、秋の祭りを盛り上げ、盆踊り大会を後援し、地域ぐるみの運動会を自治会と共催するなど、地区の諸行事に協力している。そこには、かつての青年団のよき伝統を受け継ぎ、新しい町づくりを目ざして温かい連帯を広げようという心意気がこもっている。

■美和幼稚園

昭和四十九年四月十日、西坂田二丁目一二一五号に開園。現副理事長・苅込喜八の発案により、理事長・秋元徳三、理事・秋元富雄の協力により私立幼稚園としてスタートした。昭和五十六年、在園児は男子五八名、女子五四名。園長ほか教諭は二三名である。



美和幼稚園